

付加語 *siempre* と否定極性表現の挙動が意味するもの  
Lo que se desprende de los comportamientos del adjunto *siempre*  
y los términos de polaridad negativa \*)

石岡 精三  
Seizo ISHIOKA

0. はじめに

(1) で観察されるように、Wh 要素と定動詞の間に付加語 (*siempre* 'always') が生起する派生の文法性判断は揺れる。同様の揺れはそれぞれ、否定極性表現 (Negative Polarity Item (NPI)) である付加語 (*nunca* 'never') と項である NPI (*nadie* 'nobody') が生起する (2) と (3) においても観察される。

(1) a.\*¿Qué **siempre** lee María? 'What does María always read?' (Torrego 1984: (4b))

b.¿Qué diarios **siempre** lee Juana? 'Which newspapers does Juana always read?' (Suñer 1994: (53a))

(2) a.\*¿Quién **nunca** se despide cuando se va?

'Who never says goodbye when he leaves?' (Ordóñez and Olarrea 2006: (44b))

b.¿Con quién **nunca** trabaja Juan? 'Who does Juan never work with?' (Inclán 1997: p.31, (33))

(3) a.\*¿Qué **nadie** sabe? 'What does nobody know?' (Ron 1998: p.146, (191a))

b.¿Qué libros **nadie** lee? 'Which books does nobody read?' (Olarrea 1996: P.101, (88a))

Zubizarreta (2001) と Cardinaletti (2007) の融合を目指す本稿において、上で確認された揺れを説明する論法を提示する。具体的には、関係する付加語と NPI の移動に対して異なる着地点を想定する。本稿は以下のように構成される。第1節では、Zubizarreta (2001) と Cardinaletti (2007) の概略とその問題点を示した後に、両者を融合する形の新たな論法を提案する。第2節では、この論法が付加語 (*siempre*) にも適用可能であることを示す。結びを構成する第3節では、この論法が基本的に Inclán (1997) が挙げるスペイン語方言と Caribbean Spanish (CS) にも適用可能であることを示す。併せて、本稿の仮説群に対して問題を引き起こすと思われる用例に検討を加える。

1. Cardinaletti (2007) と Zubizarreta (2001) の概略と提案

本稿では独立節の構造として (4) を想定する。Hanging Topic Left Dislocation (HTLD) の適用を受け要素は Disc(ourse) の先端部に生起する (4c-d)。Force, Cl そして Wh/Q の先端部には Clitic Left Dis-

(4) a. Root [-wh] Clause: [Disc(ourse)P [ForceP [Cl(itic)P [TP [Neg(ation)P/Affirm(ation)P ... ]]]]]

b. Root [+wh] Clause: [DiscP [Wh/QP [Cl(itic)P [TP [Neg(ation)P/Affirm(ation)P ... ]]]]] (ForceP → Wh/QP)

c. (En cuanto a) Juan, ¿quien lo ha visto? 'As for Juan, who has seen him?' (Escobar Álvarez 1995: p.103, (66a))

d.¿Tu hermano qué quiere? 'What does your brother want?' (Olarrea 1996: p.70, (48d))

e.\*¿Qué tu hermano quiere?

location (CLLD) の適用を受けた要素が生起する。主語要素も CLLD 適用を受ける。Wh 要素は Wh/Q

の内部先端部へ移動するため、主語要素が Wh/Q の先端部に生起する適切な派生として (4d) が指定される。主語要素が CI の先端部に生成される (4e) の非文性はどのように説明されるであろうか。

Cardinaletti (2007) によれば、顕在的な主語のような Strong Subject と *pro* のような Weak Subject の生成位置はそれぞれ、Subj と T の先端部である (Subj が CI に対応する点に留意されたい。以下において、CI の表記を採用する)。イタリア語用例 (5) の相違から、(6) の一般化が導出される。しかしながら、いかなるプロセスによってこの一般化がもたらす効果が導出されるか提示されていない。

(5) (Cardinaletti (2007: (1a); (2a))

a. \*Chi [CIP Gianni [TP [T ha invitato ...]]]? 'Whom did Gianni invite?'

b. Chi [CIP [TP *pro* [T ha invitato ...]]]? 'Whom did he/she invite?'

(6) Generalization I (Cardinaletti 2007: (29))

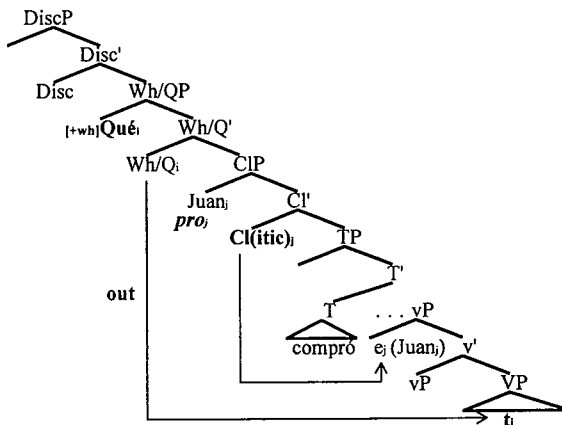
Only strong subjects are excluded from occurring between the *wh*-phrase and the verb in *wh*-questions, whereas weak subjects (either null or overt) are permitted.

Zubizarreta (2001) は Wh 要素がその先端部へ移動する Wh/Q の投射と接語演算子 (Clitic Operator) の投射を想定する (8)。スペイン語の Q 素性と Wh 素性が Wh/Q に融合していると想定される。

(7) a. \*¿Qué: Juan<sub>i</sub> compró t<sub>i</sub> ayer? b. ¿Qué: compró Juan t<sub>i</sub> ayer? 'What did Juan buy yesterday.'

c. ¿Qué: *pro* compró t<sub>i</sub> ayer? 'What did he/she buy yesterday?'

(8)



この CI の投射は顕在的な主語要素、あるいは空の主語要素である *pro* を外在化する機能をもつ。その先端部に生成される主語要素 (*Juan*) と同一指標をもつ CI が *v* の先端部にある変項 (*e<sub>j</sub>*) を束縛する。Wh 要素 (*qué* 'what') がその先端部へ移動した Wh/Q は Spec-Head Agreement により Wh 要素の指標が付与され、演算子 (Operator) として機能する。つまり、Wh/Q もまた、*vP* 内部にある変項を束縛することになる。しかしながら、Wh/Q による束縛は最小原理 (Minimality) によって排除される (原初痕跡 (*t<sub>i</sub>*) を C 統御し、Wh/Q を C 統御しない潜在的な束縛要素 CI が介在する)。主語要素が Spec(*v*) に生成される (7b) はこの最小原理によって排除されることはない。Zubizarreta (2001) では、主語要

素一般が CI の先端部に生成される。空の主語要素である *pro* も CI の先端部に生成されることになる。つまり、(7a) の非文性を説明する論法は (7c) を不適格と予測する。しかしながら、(7c) は適格と判断される。(9) は主語以外の要素も CI の先端部に生成され、Wh 移動を阻止することを示す。

(9) a.\*¿Qué novela a **Laura** le encargaste? ‘Which novel did you order for Laura?’ (Inclán 1997: p.4, (6))

b.\*¿Qué **aquí** venden? ‘What do they sell here?’ (Inclán 1997: p.4, (10))

c.\*¿Qué diarios **ahora** lee Juana? ‘Which newspapers does Juana read now?’ (Suñer 1994: (53c))

ここで、(10) の仮説を想定する。(10a, b) はそれぞれ、Cardinalletti (2007) と Zubizarreta (2001) に基づくものである。T が演算子として機能しないため、*pro* が生起する (7a) は最小原理によって排除されることはない。(10c) は Emphatic Movement (EM) を駆動する素性 ([+affirm], [+neg]) の付与形式が関与する要素ごとに異なることを示す。(10d-e) は EM と Wh 移動に参加する要素と当該移動に関与する素性が付与されるゼロ範疇との隣接を要求する条件です。<sup>1)</sup>

#### (10) 仮説

- a. CLLD の適用を受けた顕在的な要素と *pro* はそれぞれ、CI と T の先端部に生成される。
- b. その先端部の要素と同一指標の関係にある Wh/Q と CI のみが演算子として機能する。
- c. Emphatic Movement (EM) に関与する素性 ([+neg(ative)], [+affirm(ative)]) は CI と T の一方に任意に、あるいは CI のみに付与される。
- d. EM の適用を受ける EM 要素は関係素性が付与されるゼロ範疇 (CI, T) との隣接を要求する。
- e. Wh 移動の適用を受ける要素はゼロ範疇 (Wh/Q) との隣接を要求する。

(11a-c) は Emphatic Movement の用例である。(11a-c) において、移動要素は CI、あるいは T の先端部へ移動する。後述する付加語 (*frecuentemente* ‘frequently’) を除き、EM 要素は CLLD の適用を受けることはない。仮に CLLD の適用が可能だと考えてみよう。要素が CI、あるいは Force の先端部に生成されることになる。最小原理違反が起こらないため、非文と判断される (11b) が適格と予測されることになる。(11b) の非文性は構造 (12a) によって示される。演算子として機能する同一のゼロ範疇である CI に主語と EM 関連の指標が付与されるため、最小原理の違反は起こらない (演算子として機能するゼロ範疇 (Wh/Q, CI) には囲い文字で表記する)。

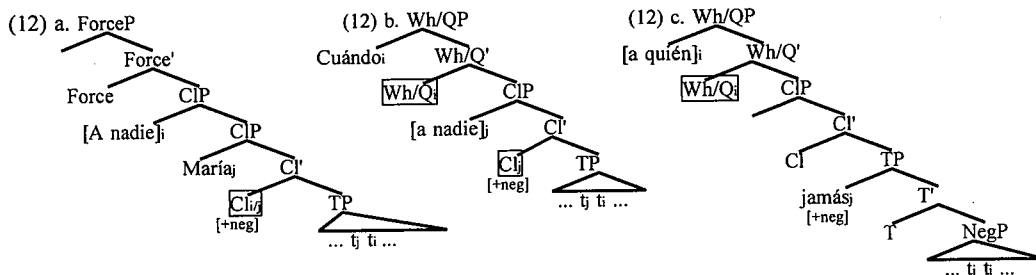
(11) Emphatic Movement (Zubizarreta 1998: p.103, (4a); p.104, (8a); p.106, (18b))

a. [CIP (TP) [A **nadie**] le devolió María su manuscrito]. ‘María returned his manuscript to **nobody**.’

b.?[CIP [A **nadie**], María le devolió su manuscrito]. ‘María did not return her manuscript to **nobody**.’

c.\*¿[W/QP Cuándo [CIP [a **nadie**] invitarás]]? ‘When will you invite **nobody**?’

(11b) の非文性は (10d) にある EM 要素と EM 関連素性 (EM 素性) が付与される CI に課される隣接条件に還元される。Zubizarreta において、*nadie* が EM に参加する派生において EM 素性は CI にのみ付与されるため、(11c) の非文性は最小原理違反によって説明される (構造 (12b))。



Zubizarreta (2001) において, [Wh 要素 + EM 要素] の語順が常に排除されるわけではない。(13a) で確認されるように, [Wh 要素 + NPI (*jamás* 'never')] の語順は許容される。(13a) の適格性は, 付加語 (*jamás*) が生起する派生において EM 素性が CI でなく T に付与されると想定することにより説明される。(13a) の派生構造 (12c) を参照されたい。この場合 T はもとより CI もまた演算子として機能しないため, 当該用例は最小原理によって排除されることはない。<sup>2)</sup>

(13) a. ¿[A quién] **jamás** ofenderías tú con tus acciones? 'Whom would you never offend with your actions?'  
(Zubizarreta 1998: p.185, fn.11, (iv); Suñer 1994: (21a); Inclán 1997: p.23, (13a); Bosque p.c.; Demonte p.c.)

b. \*¿A quién **nadie** ofendería con sus acciones? (Zubizarreta 1998: p.185, fn.11, (v))  
'Who would nobody offend with his actions?'

(11c) の非文性を説明する論法は (13b) を不適格と予測する。本稿の用例 (2) と (3) の相違も同様の論法によって説明可能である。EM 素性 ([+neg]) が CI と T の一方 (具体的には T) に付与される (2b) と (3b) は, 最小原理と隣接条件 (10d-e) に違反することはない (適格と予測される)。一方 (2a) と (3a) ではこの EM 素性は CI に付与されるため, 最小原理違反が起こる (不適格と予測される)。

## 2. 付加語 (*siempre*) が生起する用例

付加語 (*siempre*) が生起する (1) の相違はどのように説明されるのか。最初に, 付加語 (*ahora*) との比較の観点から当該付加語の用法について考える。(14a) と (15a) との対比が興味深い。

(14) a. **Ahora**, Lina lee dos diarios. 'Now Lina reads two newspapers.' (Suñer 1994: fn.27))

b. Todo **ahora** se basa en los ordenadores especialmente. (corpus of Ishioka's own compiling)  
'Now everything is based especially on computers.'

c. Volvamos **ahora** a la cuestión de la subcategorización. (corpus of Ishioka's own compiling)  
'Now we will get back to the question of subcategorization.'

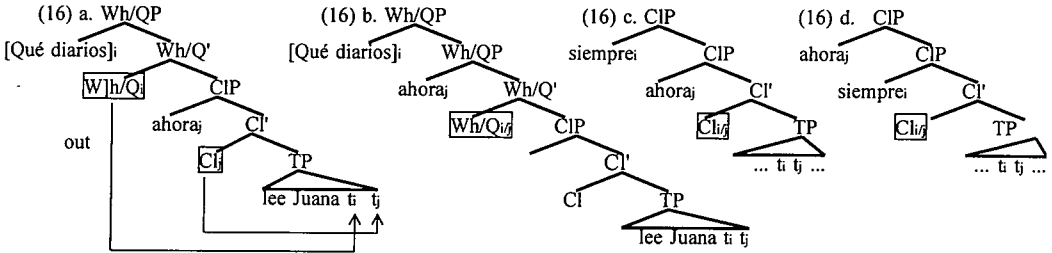
d. \*¿Qué diarios **ahora** lee Juana? 'Which newspapers does Juana read now?' (Suñer 1994: (53c)) (=9c)

(15) a. \***Siempre** Luis se prepara las clases. 'Luis always prepares for his lessons.' (Brucart 1993: (54a))

b. Luis **siempre** se prepara las clases. 'Luis always prepares for his lessons.' (Brucart 1993: (54b))

c. Desde entonces siguió **siempre** su trayectoria política literaria. (corpus of Ishioka's own compiling)  
'Since that time he/she always followed his/her literary politic career.'

定動詞の左方に生起する付加語 (*ahora*) は CLLD の適用を受けられると思われる。つまり、当該付加語は Cl, あるいは Force (Wh/Q) の先端部に生成される (定動詞が T に生成される点に留意されたい)。これにより、(14a, b) の語順が説明可能となる。この論法は本稿の (9c) を不適格と予測する (当該用例を (14d) として再掲する)。(14d) に対して (16a-b) の派生構造が想定される。



(16a) と (16b) はそれぞれ、最小原理と Wh/Q との隣接を要求する (10e) によって排除される。(15a) と (17b) の非文性により、定動詞の左方に生起する付加語 (*siempre*) に対する CLLD の適用を想定できない。ここで、当該付加語に対して Emphatic Movement (EM) が適用されると想定する。(15a) と (17b) において、主語要素 (*Luis*) と付加語 (*ahora*) は Cl の先端部である Spec(Cl) に生成される。EM 素性 ([+affirm]) が Cl に付与されるため、付加語 (*siempre*) もまた Cl の先端部 (CIP に付加した位置) へ移動する (構造 (16c) を参照されたい)。EM 要素と EM 素性が付与されるゼロ範疇との隣接条件により、これらの派生は不適格と予測される。(15b) と (17a) は最小原理にも隣接条件違反にも違反しないため、適格と予測される ((17a) の派生構造 (16d) を参照されたい)。

(17) a. **Ahora siempre protesta.** 'Now he/she always complains.' (Hernanz 1993: (19a))

b. \***Siempre ahora protesta.** (Hernanz 1993: (19b))

付加語 (*siempre*) に対して EM が適用されると想定することにより、本稿の (1) を含む (18) と (19) の用例はすべて説明可能となる。(18a-b) において、EM 素性 ([+affirm]) は Cl のみ付与される。(19a-b) では、当該素性が Cl あるいは T (具体的には T) に付与される。

(18) a. \*¿**Qué siempre lee María?** (Torrego 1984: (4b)) (=1a))

b. \*¿**Qué siempre canta María?** (Brucart 1993: (55a)) 'What does María always read/sing?'

(19) a. ¿**Qué diarios siempre lee Juana?** (Suñer 1994: (53a); Bosque p.c.)

'Which newspapers does Juan always read?'

b. ¿**Qué siempre ordena Juan en este restaurante?** (Arnaiz 1992: (20a))

'What does Juan always order in this restaurant?'

(20a-c) の適格性は付加語 (*frecuentemente* 'frequently') に対する CLLD の適用が許容されることを示す。(21a-b) においてこの付加語に CLLD が適用されると考えた場合、Wh 要素と Wh/Q との隣接条件、あるいは最小原理により、(21a-b) の双方は不適格と予測されることになる。

(20) (Kovacci 1999: p.742, (85a); Ron 1998: p.103, (127a); Zagona 2006: p.27)

a. **Frecuentemente**, los lectores . . . me interrogan sobre el porqué . . .

‘Frequently the readers . . . asked me about the reason . . .’

b. Dani **frecuentemente** toca la guitarra. ‘Dani frequently plays the guitar.’

c. Se afirma **frecuentemente** que el clítico *le* es obligatorio en estos casos.

‘It is declared frequently that the clitic *le* is obligatory in these cases.’

(21) (Suñer 1994: (53b); Caminero 1985: p.117, (25b))

a.¿Qué diarios **frecuentemente** lee Juana? ‘Which newspapers does Juana frequently read?’

b.\*¿A quién **frecuentemente** trae Juan a la escuela? ‘Whom does Juan frequently bring to school?’

しかしながら、(21a) は適格と判断される。この問題は付加語 (*frecuentemente*) が EM の適用を受けると考えることにより打開される。(21a) において EM 素性 ([+affirm]) は CI と T の一方(具体的には T) に付与されるため、適格な派生が生成可能となる。(21b) においてこの EM 素性は CI に付与されるため、当該派生は最小原理によって排除されることになる。<sup>3)</sup>

### 3. 結び

本稿ではこれまで、Wh 要素と定動詞の間に生起する顕在的な主語要素を含む CLLD の適用を受ける要素は CI の先端部に生成され、EM 素性は CI にのみ、あるいは CI と T の一方に任意に付与されると想定している。Inclán (1997) の用例 (22) において EM 素性が CI と T の一方に任意に付与されると考えても、(22d) を除くすべてが非文と予測されることになる。しかしながら、(22b-c) と (22f-g) は適格と判断される。この問題は EM 素性が付与された T が T の先端部に生成される形の CLLD を誘発すると考えることにより打開される。CLLD の適用を受ける要素 (*Carmen, a las cinco, en verano*) が T の先端部に生成可能となるため、(22b-c) と (22f-g) は適格と予測されることになる。

(22a) と (22e) は、EM 要素が存在しないため T の先端部に生成される可能性は排除されるため非文となる。(22h) は EM 素性が付与される T と EM 要素との隣接条件によって排除される。

(22) (Inclán 1997: p.3, (3); p.6, (13a-b); p.66, (24e); p.18, (4); p.31, (35); p.33, (39); p.34, (40); p.43, (59))

a.\*¿A quién **Carmen** llamó?

b.¿A quién **Carmen sí /no** llamó?

‘Who did Carmen call?’

‘Who did Carmen positively /not call?’

c.¿A quién **Carmen siempre** llama?

d.¿Con quién **nunca** trabaja Juan?

‘Who does Carmen always call?’

‘Who does Juan never work with?’

e.\*¿Con quién **a las cinco** llegó Juan? ‘Who did Juan arrive with at five?’

f. En Londres ¿con quién **a las cinco nunca** tomaste el té? ‘In London, who did you never have tea with at five?’

g. Allí, ¿para quién **en verano siempre** hacían fiestas? ‘There, who did they always throw parties for in summer?’

h.\*¿Para quién **nunca Carmen** preparó un pastel de cumpleaños?

'Who did Carmen never prepare a birthday cake for?'

Suñer (1994) と Lizardi (1993) が挙げる (23) の Puerto Rican Spanish (PRS) 用例は EM 要素が存在しない場合でも CLLD の適用を受ける要素が T の先端部にも生成可能であり、付加語 (*siempre*) と NPI に対する EM 素性が CI と T の一方 (具体的は T) に付与されると想定することにより説明される。

(23) PRS (Suñer 1994: (57a); (59b); Lizardi 1993: p.57, (18b); p.57, (18a))

a.¿Qué **ese hombre** le ha quitado a eso?

b.¿Qué **al Rafo** le han hecho?

'What did that man take away from that?'

'What did they do to Rafo?'

c.¿A **quién tú casi siempre** ves?

d.¿Qué país **tú nunca** quisiste visitar?

'Who do you almost always see?'

'Which country did you never want to visit?'

Ordóñez and Olarrea (2006) が Santo Domingo において調査した Caribbean Spanish (CS) の用例 (24a) と (24b) の相違は代名詞主語要素が Spec(v) でなく T の先端部に生成され、T の先端部に生成される当該主語要素が定動詞が生成される T と隣接すると考えることにより説明される。(24c-d) の非文性は付加語 (*siempre*) と NPI に対する EM 素性は CI に付与されると考えることにより説明される。付加語 (*ya* 'already') に対する EM 素性は T にも付与され、この場合 EM 要素と T との隣接条件が適用されないと想定すると (24e-f) の適格性が説明可能となる。(22h) で観察したように、Inclán (1997) が挙げる用例では、EM 要素と T との隣接条件が適用される。4)

(24) CS (Ordóñez and Olarrea 2006: (2a); (2a); (44a); (44b); (43a); (47))

a.¿Qué **tú** comes? 'What do you eat?'

b.\*¿Qué comes **tú**? 'What do you eat?'

c.\*¿A **quién siempre** besas?

d.\*¿Quién **nunca** se despide cuando se va?

'who do you always kiss?'

'Who never says goodbye when he leaves?'

e.¿A **quién ya** has besado?

f.¿A **quién ya tú** habías reconocido?

'who have you already kissed?'

'Who had you already recognized?'

最後に、(25) について考える (NCS は Non-Caribbean Spanish を指す)。CS と NCS の双方において、(24c-d) に対応して EM 要素に Contrastive Focus (CF) Stress が付与される (25a-b) は適格と判断される。(25c-d) においても、EM に参加可能な要素に付与された CF Stress が派生を救う。(26a) が示すように、Focus 要素移動と Wh 要素移動の共起は排除される。Focus 要素の移動は主語-動詞の倒置を要求する。つまり、(25) と (26a-b) で観察される CF は相異なるものと考えられる。(26a-b) において、CF 関連素性は Wh/Q に付与される ([-wh] Clause では当該素性が Force に付与される)。つまり、(26a) は Wh 要素と Wh/Q との隣接条件によって排除される。(26b) は最小原理に違反する。

(25) (Ordóñez and Olarrea 2006: (44a); (447b); fn.10, (i); fn.10, (ii))

a.¿A **quién SIEMPRE** besas? (CS)(NCS)

b.¿Quién **NUNCA** se despide cuando se va? (CS)(NCS)

'who do you always kiss?'

'Who never says goodbye when he leaves?'

- c. (\***Ya /YA**) tú has metido la pata. (NCS) d. (\***Siempre/SIEMPRE**) tú me llevas la contraria. (NCS)

'Already you have stuck your foot in your mouth.' 'You always go against me.'

(26) (Campos and Zampini 1990: (32b); Hernanz and Brucart 1987: p.77, (18b, a); Campos 1986: p.154, (99a))

- a. \*¿**Cuándo A MARÍA**, le escribieron (y no a Pedro)? (NCS)

'When TO MARÍA did they write ( and not to Pedro)?'

- b. \***EN PRIMAVERA** María aprobará. (NCS)

- c. **EN PRIMAVERA** aprobará María. (NCS) 'It is in spring that María will pass the examination.'

- d. **UNA CARTA** (sí que) María le escribirá a su hermana mañana. (NCS)

'María will write A LETTER to her sister tomorrow.'

(27d) において主語－動詞倒置が適用されない点に留意されたい (Campos (1986) が指摘するこの CF を *si que* CF と呼ぶことにする)。Wh/Q (Force) と CI の間に生成されるゼロ範疇 X に Focus 素性が付与され、この X が省略可能な *si que* によって実現されると考えてみよう (この X は演算子として機能しないと想定する)。X 先端部に *si que* CF の適用を受ける要素が移動する (構造 (27))。この前提により、(25) は EM に参加可能な要素に *si que* CF が適用された用例として説明される。CS において代名詞主語 (この場合 *tú*) が T の先端部に加え X の先端部にも生成可能であると考え、[Wh 要素 + *si que* CF 要素 + *tú*] だけでなく [Wh 要素 + *tú* + *si que* CF 要素] もまた適格と予測されることになる。この予測は (28a-b) によって例証される。<sup>5)</sup>

(27) [DiscP [Wh/QP/ForceP [XP [X' (sí que) [Cl(itic)P [TP [NegP/AffirmP ... ]]]]]]]

(28) a. ¿Cuánto **DE AQUÍ** tú sacaste? (CS) 'How much did you take FROM HERE?' (Ron 1998: p.201, (276a))

b. ¿Cuándo **tú A CARMEN** le hablaste? (CS) 'When did you talk TO CARMEN?' (Ron 1998: p.201, (276b))

今後、この *si que* CF が適用される話者グループとその適用条件を特定する必要がある。<sup>6)</sup>

#### 註

\*) 本稿は、日本ロマンス語学会第 46 回大会 (東京大学本郷キャンパス 2008 年 5 月 18 日) における口頭発表の一部を拡張したものである。

1) Zubizarreta (2001) によれば、Bare Indefinite (*algo* 'something', *alguien* 'someone', *varios/varias* 'several') と NPI (*nunca/jamás* 'never', *nada* 'nothing', *nadie* 'nobody', etc.) が EM に参加する。後述するように、本稿では付加語 (*siempre* 'always') もこの移動の適用を受けると考える。(10b) にあるように、T は演算子として機能しない。本稿の匿名レフリーも指摘するように、これは T がもつ範疇として性質が CI あるいは Force(Wh/Q) とは異なることに起因するかも知れない (詳細な論考に関しては、稿を改める)。

2) Wh 要素 (*por qué*) が生起する以下の用例は当該 Wh 要素が CI によって C 統御されない位置、例えば Wh/Q の先端部に生成されると想定することにより説明される。

(i) (Zubizarreta 1998: p.106, (17a); (17b))



a.¿Por qué [a nadie] quieres invitar? 'Why don't you want to invite anybody?'

b.¿Por qué algo no me compras? 'Why don't you buy me something?'

- 3) EM 素性 ([+affirm]) が T にも付与され (21a) の判断が下される話者グループにおいても, (ib) は不適格と判断される。EM 素性 ([+neg]) が CI に付与されると考えると, (ib) が適格と予測されることになる。この問題は同時に生起する EM 素性が同一のゼロ範疇 (CI, あるいは T のいずれか) に付与されると想定することにより打開される。EM 要素と EM 素性が付与される CI, あるいは T との隣接条件により, (ib) は不適格と予測される。本稿の仮説群によれば, 付加語 (*frecuentemente*) に対して CLLD が適用された派生は適格と予測される。この予測は (iia) によって例証される。(iib) の用例が示すように, 同一のゼロ範疇に対する素性 ([+affirm], [+neg]) の同時付与が不可能と考えることはできない。Affirm と Neg のそれぞれに小辞 (*si* 'positively, indeed') と (*no* 'not') が生成される派生では T に EM 素性が付与され, 当該小辞は定動詞が生成される T の左端に生起すると考える。

(i) a. Nadie toca **frecuentemente** la guitarra. (Ron 1998: p.103, (127c))

b.\*Nadie **frecuentemente** toca la guitarra. 'Nobody plays the guitar frequently.' (Ron 1998: p.103, (127d))

(ii) a. Frecuentemente nadie toca la guitarra. 'Frequently nobody plays the guitar.'

b. **Siempre no** están contentos los ricos. 'It is always the case that the rich are not satisfied.' (高橋 1972: p.273)

- 4) 代名詞主語要素が常に T の先端部に生成されるプロセスに関しては稿を改めて検討する。(i) で観察されるように, 代名詞以外の顕在的な主語要素は CI, あるいは Wh/Q (Force) の先端部に生成される。

(i) a.\*¿Qué José quiere? (CS) 'What does José want?' (Ordóñez and Olarrea 2006: (52c))

付加語 (*ya*) が生起する (24e) のパターンは Non-Caribbean Spanish (NCS) でも適格と判断される (Contreras 1996: (11b)) と Olarrea 1996: p.43, (8) を参照されたい。(25c) で判明するように, 付加語 (*ya*) に対する CLLD の適用は排除される。

- 5) この場合, 代名詞主語要素と範疇 X との隣接条件は適用されないと考える必要がある。

- 6) 付加語 (*siempre*) と NPI に対する *si que* CF が排除される話者グループの存在が確認される。

(i)\*Marta **SIEMPRE/NUNCA** *si que* se acuesta tarde. (Campos 1986: p.169, fn.46, (i); (ii))

'Marta ALWAYS/NEVER goes to bed late.'

#### 参考文献

- Arnaiz, Alfredo (1992) "On Word Order in *Wh*-Questions in Spanish," *MIT Working Papers in Linguistics* 16, 1-10.
- Brucart, José M.' (1993)"Sobre la estructura de SCOMP en español," *Sintaxi, teoria i perspectives*, ed. by Amadeu Viana, Pagès Editors, Lleida.
- Caminero, Rosario (1985) *WH Q Movement in Spanish Compared to WH Movement in English*, Ph.D. dissertation, University of Pittsburgh.
- Campos, Héctor (1986) *Inflectional Elements in Romance*, Ph.D. dissertation, University of California, Los Angeles.

- Campos, Héctor and Mary Zampini (1990) "Focalization Strategies in Spanish," *Probus* 1.2, 47-64.
- Cardinaletti, Anna (2007) "Subject and *WH*-Questions. Some New Generalizations," *Romance Linguistics 2006: Selected Papers from the 36th Linguistic Symposium on Romance Languages (LSRL), New Brunswick, March 31-April 2, 2006*, ed. by Camacho José, Nydia Flores-Ferrán, Liliana Sánchez, Viviane Déprez, and María José Cabrera, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia, 57-79.
- Contreras, Heles (1996) "Economy and Projection," *Aspects of Romance Linguistics*, ed. by Parodi Claudia, M. Saltarelli, and M. L. Zubizarreta, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Escobar Álvarez, M.Á (1995) *Lefthand Satellites in Spanish*, Ph.D. dissertation, Utrecht University.
- Hernanz, M.ª Luisa (1993) "A propósito de los adjuntos libres," *Sintaxi: Teoria i Perspectives*, ed. by Amadeu Viana, Pagès Editros, Lleida.
- Hernanz, M.ª Luisa and José M.ª Brucart (1987) *La Sintaxis*, Editorial Crítica, Barcelona.
- Inclán, Sara (1997) *Absence of Verb Inversion and Specificity in Peninsular Spanish WH-Questions*, Ph.D. dissertation, University of California, Los Angeles.
- Kovacci, Ofelia (1999) "El Adverbio," *Gramática descriptiva de la lengua española*, vol.1, directed by Ignacio Bosque and Violeta Demonte, 704-786, Espasa Calpe S.A., Madrid.
- Lizardi, Carmen (1993) *Subject Position in Puerto Rican WH-Questions: Syntactic, Sociolinguistic, and Discourse Factors*, Ph.D. dissertation, Cornell University.
- Olarrea, Antxon (1996) *Pre and Postverbal Subject Positions in Spanish: A Minimalist Account*, Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Ordóñez, Francisco and Antxon Olarrea (2006) "Microvariation in Caribbean/non Caribbean Spanish Interrogatives," *Probus* 18, 59-96.
- Ron, María Pilar (1998) *The Position of the Subject in Spanish and Clausal Structure: Evidence from Dialectal Variation*, Ph.D. dissertation, Northwestern University.
- Suñer, Margarita (1994) "V-Movement and the Licensing of Argumental *Wh*-phrases in Spanish," *Natural Language and Linguistic Theory* 12, 335-372.
- Torrego, Esther (1984) "On Inversion in Spanish and Some of its Effects," *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.
- Zagona, Karen (2006) *Sintaxis generativa del español*, trans. by Heles Contreras and Conxita Lleó, Visor Libros, Madrid
- Zubizarreta, María Luisa (1998) *Prosody, Focus, and Word Order*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Zubizarreta, María Luisa (2001) "The Constraint on Preverbal Subjects in Romance Interrogatives," *Subject Inversion in Romance and the Theory of Universal Grammar*, ed. by Aafke Hulk and Jean-Yves Pollock, 183-204, Oxford University Press, Oxford/New York.
- 高橋正武 (1972) 『新スペイン語広文典』, 白水社, 東京.